

# エディトリアル

地域医療振興協会 常務理事・与那国町診療所 管理者 木下順二

特に慢性疾患の治療薬の中には長期にわたり継続投与されているものが少なくない。必要があって継続している薬剤ももちろん多いが、「この患者さんに何故この薬？」と気になって過去カルテをレビューしてみると、アスピリン投与と併用で出されていたプロトンポンプ阻害薬がアスピリン中止後もそのまま残っていた、一時的な症状への対応として開始された薬がそのまま年余にわたり継続されていた、診断的治療として投与してみた薬が効果を評価されないまま継続されていた、といった残念な事実が判明することもある。自院・他院を含め処方薬同士が作用の重複や拮抗に陥っていることもしばしば経験される。

2023年1月から電子処方箋の運用が開始されたが、そのメリットとして複数医療機関の重複投与や相互作用を回避できるということも記されている。しかし、実際に誰がどのように総合的判断をし、責任を持って処方調整するのかという問題は棚上げされており、目論見通りの効果は期待しがたいだろう。

本特集では、長期間の処方で問題が発生しがちなケースについて取り上げ、主として薬剤師の立場から、薬理作用やエビデンスに基づき、どのように疑義照会・処方提案を考えるか、医師の総合的判断を支援するかという観点でご執筆いただいた。

山崎真里論文では、総論として台東区立台東病院・老人保健施設千束における処方適正化の取り組みについてご紹介いただいた。「生活を支える視点」からの多職種での取り組みは大変参考になる。

以降は各論としてよく見かける漫然処方を5つの分野で論じていただいた。

皆川祐亮論文では、酸分泌抑制薬について取り上げた。PPIをはじめとするこの系統の薬剤は極めて多数の患者さんが長期に内服しており、胃全摘後の方に処方されていて苦笑することもあった。日本内科学会雑誌2023年1月号にも「PPIの功罪(PCABを含む)」として50ページ以上の特集記事が掲載されるなど、見直しが必要な薬の代表格と言える。

森玄・原田拓論文では、めまい薬について取り上げた。“めまい”の訴え内容や原因は極めて多彩であり、訴えが慢性的であるがために漫然化しやすい薬剤でもある。何より薬剤に起因するめまいも少なくない。

藏田康秀論文では、自律神経系に作用する諸薬剤についてまとめていただいた。複数診療科で互いに拮抗・重複する作用の薬が投与されやすい分野でもあり、処方全体の整合性を混乱させる大きな原因となっている。

仁部光貴論文では薬剤に起因する電解質異常について取り上げた。電解質異常が起こる薬理学的機序や、亜鉛製剤のキレート形成による吸収率低下などにも触れていただいた。

石渡啓真論文では、便秘治療薬について取り上げた。従来日本における便秘治療薬への関心は高かったとは言えず、多量の刺激性下剤が長期間常用されているケースも見受けられる。バリエーションが増えた便秘薬の使い分けや、非薬物療法にも触れていただいた。

坪谷綾子論文では、鎮痛剤について取り上げた。慢性の腰痛・膝痛などを訴える高齢者は多い。長期間アセトアミノフェンやNSAIDsの内服・外用剤が処方されていることがしばしばある。鎮痛薬の減薬・中止は困難なタスクであることも多いが、長期投与のエビデンスや、鎮痛剤に代わる治療オプションにも触れていただいた。

漫然処方の是正のためには患者さんの納得が得られることが重要であり、丁寧な説明と細やかなフォローアップを心がけ辛抱強く取り組んでいかなくてはと思う。